

日本語史研究の現状と展望

康仁善*

〈 Abstract 〉

Current trends and prospects of studies on the history of Japanese language

By overviewing around 40 historical research articles published over the past 2 years, it is revealed that topics basically include documentation, orthography, phonology, lexicon and grammar. In terms of the source of analysis, a large portion of articles are based on foreign language data or multilingual data. Further, it is noteworthy that almost all of the articles focus on the period of language change. A considerable number of articles discuss the grammar and lexicon of "Kyogen" at the time when the language changed from Middle Japanese to Early Modern Japanese. There are also a good number of articles that focus on aspects of the changes of Early Modern Japanese by analysing the differences between the original version and revised version of "Shokaishingo", which is a foreign language source. Introduction to, and research on foreign language study books at the time when Modern Japanese changed to Contemporary Japanese is also quite active.

Field: Japanese History

Keywords: Senjimon, Monzenyomi, Kyogen, Japanese language study books in the Joseon Dynasty, Korean language study books

1. はじめに

日本語の歴史的な研究は領域別には研究資料、文字・表記、音韻、文法、語彙の方面があり、各方面の論考を研究対象の時代別に展望する。この二年間、韓国内における史的研究はあまり多いとは言えないし、学術振興財団の国内登載学術誌に載っている論文は40編余りにすぎない。それで、なるべくすべての論文に触れて見ようと思う。研究対象の言葉が日本語のみ(単一言語資料)であるか、外国語を含んでいるのか(多言語資料)に分けてみると、後者の方が圧倒的に多い。それから両方とも日本語の変化の時期のものに集中しているようである。近代語から現代語へと変わる時期の外国語、特に朝鮮語学習書の研究が目立っている。

2. 研究資料と文字・表記

* 聖公会大学校 教授

まず、古代語の研究として重要な論考になる安熙貞(2015)は、韓国と日本の古代金石文における「之」の用例各々計105例と計126例を助詞、終結形、人名や官位名の音仮名、代名詞に分けて比較し、高句麗、新羅、日本の傾向を把握すると共に、中国『左伝』の「之」との比較を通してその特徴を確認した。これに続いて上代語についても、安熙貞(2016)は万葉集「題詞」における「之」計382例の用法とその用法の特徴を韓国と日本の古代金石文との比較によって検討する。高句麗の場合、題詞の傾向とその差は大きくないが、新羅の場合、特に助詞の用法が50%を下回っていた三国時代から統一新羅へ変わっていくにつれ、題詞の傾向に近づいていたと結論をだしている。

柳致和(2016)は、韓国側の金石文研究では高句麗の人名表記の記載様式は部名+職名+官名+人名とされているが、日本書紀の場合は部名+官名+人名になっていて職名の省略が一般的であるとしている。人名の特徴として、固有名表記には2音節が一番多く、その次に3音節が使用されたことを明らかにした。高句麗の複姓として「伊梨」「久礼」、固有名末尾字として「流、徳、群、婁、干」などを推定した。

金正彬(2015)は、大系本日本書紀に見られる漢(あや)は、倭漢・東漢・新漢・漢手・漢直・漢部などの国名・地名・姓氏・村落名のように、また、漢城の「かん」と関わる地名、「もろこし」と関わる国名などの形から、漢(あや)は中国を指していると考えられているが、日本書紀や東アジアの歴史文献などの例をもって漢(あや)はむしろ韓であり、その中でも特に百済を指している結論を出す。これの裏付けとして借字異表記の索引と分韻表を作成して付けた。

訓点資料について、小林芳規(2015)は、経典の漢文を訓読するために訓点記入を始めたと思われる奈良時代(八世紀)後半とそれに続く平安初期(九世紀)の訓点と、新羅華嚴經(東大寺蔵本)に角筆で記入した符号や文字とを比べると両者間の親近性が認められると言う。それは、梵唄譜や合符が一致すること、華嚴經に使われた初出期のヲコト点(華嚴經の点吐の変形により成立したと考えられること、並びに平安初期の東大寺僧が用いた仮名の字母が、新羅華嚴經の角筆文字の字母に一致することにその根拠を置いている。訓読法(訓読の仕方)においても、親近性の認められることを、副詞とその呼応語を取り上げて説いた。

尹幸舜(2015)は韓国の点吐口訣と日本のヲコト点は単星点と線点と複星点の体系を用いているとし、点吐口訣とヲコト点の特徴をそれぞれの用例をもって述べた。

千字文の文選読みも訓読の一種なので、ここで取り上げる。重要かつ明快な研究成果を得たと思われる呉美寧(2015)は、呉美寧(2014a)¹⁾の東大本の調査を踏まえて、日本最古の千字文の訓点本である上野本『註千字文』(1202年書写加点、重要文化財)と東京大学国語研究室蔵『註千字文』(文明年刊(1469-1497)書写加点)と京都大学谷村文庫蔵谷村本(1614年書写加点)をもとに、千字文の訓読法としての文選読みの採用と定着、及び13世紀から15世紀を経て17世紀に至るまでの千字文の訓読の変遷について考察している。文選読みとは音読と訓読を重ねるが、その間に助詞「ノ」や「ト」を入れて読む特徴も持っている。上記の三本の対照によって、文選読みを千字文の読み方として採用した時、音読と訓読を漢字の左右に分離し、当初は「ノ」や「ト」を左側、つまり訓読のところ(ノ)に記入したが、後に右側、つまり音読のところに移し、定着させたと考えられる。また、上野本の加点様相から見て、上野本は文選読みを千字文の訓読法として採用した初期の様子を示すものと考えられると論じた。なお、語順用例や自立語の用例などの比較によって、江戸時代の谷村本に先行する訓点本との継承関係を述べた。また、日本一般の千字文とは違って、無注本である京都陽明文庫蔵『千字文音決』¹⁾²⁾の字体注記、漢字音注記、仮

1) 呉美寧(2014a)「15세기 일본의 천자문 학습-東京大學 国語研究室 소장 『註千字文』을 대상으로」『일어일문학 연구』89-1 pp.147-166

_____ (2014b)「千字文의 受容과 텍스트에 관한 韓日比較研究」『일본연구』60 pp.405-421

名点による文選読みを検討した呉美寧・鄭門鎬(2015)がある。それに東洋文庫蔵古活字板の『注千字文』を調査してこの本では文選読みが定着していることを確認した呉美寧(2016)もある。

時代は下って、18世紀の『隣語大方』朝鮮刊本の頭註について、東ヶ崎祐一(2015)は主に片仮名表記の面から調査・考察して、その結果、分かったことのうち、安田章(1963)³⁾で触れられていない、または十分触れられていない特徴を列挙すると、①頭註としてはふさわしくない、語句の文字や読みの誤りを多数含む。②故事成語などの読みについては、本文での語順が日本語化しているものは漢字と仮名とが対応するように読みを付け、そうでないものは、漢字と仮名の対応を犠牲にして、日本語としてまず読めるように示してある。③使用される片仮名は「コ」が「マ」のような形であり、「ネ」「マ」「ミ」等が古態を示し、さらに「サ」「ル」が特徴的な形を示す。④語中の/wa/i/u//e//o/はそれぞれ「ワ」「イ」「ウ」「ヘ」「ヲ」で表記される。⑤オ長音は17例のうち16例がオウ型で表記される。拗長音はユ長音がイウ型、ヨ長音がヤウ型とヨウ型の両方で表記される。⑥片仮名以外にも1点疊字、2点疊字、合字「ㄱ」が用いられる。また疊字が使われるべきところに使われていない例も多い。⑦特殊拍や拗音への注意を喚起する右傍線が27例は現れるが、撥音・拗音・拗長音に限られ、促音を表す例が現れないという重要な知識を得たことである。さらにつづいて東ヶ崎祐一(2016)は倭学書の『倭語類解』、『隣語大方』(筑波大本、朝鮮刊本、アストン本)、『交隣須知』(京都大本、長崎大本、濟州本)、『講話』(苗代川本)に見られる傍線表記について、その現れる資料、数量、特徴などを考察した。その結果、傍線表記は長音・拗音・拗長音・促音には見られるが、撥音には基本的に見られないし、表記の数は資料により差があることが分かった。また傍線表記の現れの様相から傍線表記は学習者自身の手控えとして付けられたものであると推測した。

時代は更に下って、朴省姫(2015)は、中国の代表的な英中辞書の『英華字典』(1866-1869)に載っている欧州地名の表記の実態を網羅し、こいう表記方法は日本における欧州地名の表記にどのように反映されたのかを明治初期の西洋見聞録である『米欧回覧実記』(1878)と比較して分析した。その結果、『米欧回覧実記』と中国の『英華字典』の一致率は42.8%である。『米欧回覧実記』のそれ以外の表記は中国式でなく、新しく考え出した日本固有の表記で現代にも通用されていると述べた。

なお、文字それ自体に関する考察として銭谷真人(2015)がある。変体仮名の文字コード化するプロジェクトの過程で浮かびあがった「装飾的字体」の様相と性格を究明し、変体仮名の平仮名の対応表を整理した。

3. 音韻—漢字音

上代語の資料の日本書紀に関する森博達(1977a,b/1991)⁴⁾のα群中国人表記説を喚起して、β群の使用者として古代韓国語話者のことを言えるのではないかという軽いタッチの栗田英二(2015)がある。それに、蟹摂の1・2等韻では中低位母音 [e・ɛ]の主母音をもつ開口1等の哈韻、合口1等の灰韻、合口2等の皆韻の韓国漢字音の大部分は [·l(ɛi)]に、低位母音 [a・ɑ]にあたる主母音をもつ合口2等の佳韻の韓国漢字音は[ɬ(ai)]で、記紀万葉でのe乙類とe甲類がそれぞれ対応していることから、記紀万葉の字音と韓国漢字音との密接な関係を推定した河素偵(2015)もある⁵⁾。

2) 小川環樹木・田章義注解(1997)『千字文』(岩波文庫33-20-1)の訓読文の元になった本。

3) 安田章(1963)『隣語大方解題』『隣語大方 本文・解題・釈文・索引』pp.3-42

4) 森博達(1977a)「『日本書紀』歌謠仮名分布表—漢字原音より観た書紀区分論一」『文学』45-2 岩波書店 森(1991)所収

_____ (1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店

日本呉音に関する論文は二つあるが、全昌煥(2015)は、魏晉南北朝時代において臻撰字は山撰字と韻を踏む。山撰には「寒桓刪山先仙」など6韻が含まれる。山撰は広母音であるが、魏晉南北朝時代において、臻撰字は山撰字と韻を踏むが、後期になるとこのような現象は減るようになり、臻撰は独立に向かう。したがって、詩歌韻脚の視野から見ると臻撰の主母音は半狭母音であった蓋然性が高いとし、このような母音が日本呉音の中で半広母音として現れてきたのであろうと推定している。一方、趙大夏(2016)は漢字音の伝来ルートから、呉音の形成における韓国漢字音との関連性について究明しようとする。「咸撰」の漢字音を分析して、これまで数多く議論されてきた「1・2等重韻」の問題とその原因を、中期朝鮮漢字音と呉音の音形を手かかりにして究明し、中古音とは異なる音形を有する呉音と中期朝鮮漢字音の音価について再現してみた。

中世の辞書である古本節用集の諸本のうち、2本に現れている唐音の特徴を日本の呉音・漢音と比べ、声母、韻、韻尾別に整理して八つにまとめた李盛根(2016)もある。

4. 文法

金平江(2015a)は名詞述語文の形式を覚一本『平家物語』と天草版『平家物語』を対象に否定表現、過去表現、推量表現などを調査した結果、覚一本の成立した鎌倉時代にも日常語では名詞述語文の補助形式を「で」が主な語形に成り立ち始め、天草版『平家物語』の室町時代には「で」主導の傾向が定着段階に入ったと言う。それで金平江(2015b)は『万葉集』から『源氏物語』、覚一本『平家物語』、天草版『平家物語』を対象にして否定の名詞述語文の形式の「に+Ø+あらず」と「に+係(副)助詞+あらず」の出現環境や使用頻度などを調査した。これについて金平江(2016)は、覚一本『平家物語』において名詞述語文の使用形式と用例は「なり」が圧倒的であり、単独で文を終止する場合に主に使用されるが、天草版『平家物語』では「なり」が多いが「ちゃ」の方が文を終止する場合に多用されていると述べる。「なり」の縮小傾向は狂言集においても確認され、終止法には「でおりやる」の使用が目立ってきたことを確認した。

梁美錫(2015)は『天理本狂言六義』(1646年頃)、『新撰狂言集』(1929年)、『和泉流狂言大成』(1917-1919年)に見られる可能表現の主な形式のうち、以下の三つの形式を分析し、「え+否定」と「Vことかなる/Nかなる」のほうは減りつつあるが、「Vる・らるる」のほうは増えて一般化してくる様相を確認した。

中忠均(2016)は『捷解新語』における逆接条件表現をそれぞれの表現形式別に検討し、確定条件表現の場合、原刊本では2例しか見られなかった「ケレドモ」が改修本では15例と急増している点や、仮定条件表現の場合、原刊本の時から新旧形式である「トモ」と「テモ」とが共に用いられているが、総数の面で「テモ」が優位を占めている点などを確認して『捷解新語』の日本語史資料としての価値を見出した。朴喜南(2016)も『捷解新語』における理由条件表現として多用されていた「原刊本」の「ほどに」は「改修本」と「重刊本」の「により」に入れ替わったことを明示することによって「近世語」の変化様相の一面を見せた。一方、『捷解新語』の著者康遇聖の誤用例が彼の勉強不足や母語の干渉によるものとされてきたが、丁鋼徹(2015)は九州方言や韓国の東南方言から再照明しようとした。

5) 百濟や高句麗の漢字音に関する最近の研究として参考してほしい著書を挙げる。

李丞宰(2014)『漢字音으로 본 백제어 자음체계』 태학사

_____ (2016)『漢字音으로 본 고구려어 음운체계』 일조각

5. 語彙

金泳和(2016)は古代資料における「舳」に注目した。日中韓のいずれも「舳艫あるいは艫舳」の表記は「船の全体」を指しているが、日本と韓国の資料における「船+ (船/艫) は船の一部分を具体的に表わすための表記であった。「舳」の意味は最初の「船尾」の意味から時間の流れとともに「船頭」を表わすように変わり、だんだん両字を混同するにまで至り、「舳」の読みが「へ」あるいは「とも」になった原因として「舳」の意味の『説文解字』や『玉篇』における意味の変化を取り上げた。

黄竜夏(2016a)、黄竜夏(2016b)は近世日本の代表的口語資料である狂言台本、主に天正本、天理本、虎明本に見える「なかなか」の意味と用法を調査・考察し、新しい語形と意味の出現をも確認した。さらに黄竜夏(2016c)は驚流保教本と賢通本にまで考察の対象を広げた。

黄美玉(2015)は近代化への過度期において日本語の人称代名詞がどのように使い分けられていたかを、身分(武士、主人、召使など)、男女、知識の有無、漢語の使用量、職業(貿易商、外国の領事、宿引き、政府の役人など)、年齢(親、兄、兄嫁、しゅうとなど)の差に注目して考察し、日本語の多様な人称代名詞が位相差に依存し、また時代と共にその使われ方、意味が次第に変化していることが確認できた。

片茂鎮(2015)は雨森芳洲の『一字訓』の未公開の新しい版原公民館本の紹介とともに、一字漢語の字音と字訓を成す日本語を中心に検討したうえで、『交隣須知』の芳洲著者説についてその根拠の補足を試みたのである。

6. 近代朝鮮語学習書

近代に入って外国語学習書がたくさん刊行される。そのうち朝鮮語また韓国語に関するものが多い⁶⁾。それらは明治大正期の日本語の様相を示すだけでなく韓国語の言語資料としても価値がある。その故、活発に紹介、調査しているようである。以下3人の論考が目立つ。李康民(2015)は日本の開化期に刊行された13種類の多言語学習書の書誌学的紹介と韓国語や日本語の歴史に置ける意義を論じた。この学習書に見える日本語の場合、東京語が成り立っていく過程を推定しうる多様な言語現象を示していると言えよう。李康民(2016)は1903年5月に日本で刊行された『日韓通話捷徑』の内容と製作背景を関連学界に紹介すると同時に韓日両言語の研究資料として本書が持っている意義を探った。成琬珂(2015a)は島井浩が1905年に刊行した『实用日韓会話独学』を紹介し、本の構成や会話文の資料的価値を論じた。成琬珂(2015b)は、『日韓善隣通語』は明治期の最初の日本人のための朝鮮語会話学習書であり、文字、音韻、標準語と方言との差異、様々な文法事項に関わる解説が問答形式で示されていると紹介している。著者の宝迫は共通語(正格)学習のみを強調せず、方言(訛格)の学習の必要性も強調し、また、同じ用例文を敬意度により上中下の三つに分類を試みた。斉藤明美(2015a)は弓場重榮の『実地応用朝鮮語独学書』(明治29年)と『ポケット朝鮮語独学』(大正4年)、それから『簡易捷徑日語独学』(明治30年)の会話の用例に見られる日本語を対照して、「目標言語である韓国語の意味として付記された日本語」と「目標言語そのものである日本語」との違いを確認し、その様相や意味を述べた。斉藤明美(2015b)は明治35年(1902年)に島井浩によって作成された韓国語学習書である『实用韓語学』の「名詞」(附録)の部門配列と日本語の特色について述べたもので、『实用韓語学』の「名詞」の部門配列は、先行研究⁷⁾の指摘とは違って、『日韓通

6) 成琬珂(2014a)『近代朝鮮語会話書一資料解題一』 도서출판가연
 _____(2014b)『近代朝鮮語会話書に関する研究』 제이앤씨

話』よりも『実地応用朝鮮語独学書』の「単語」の部門配列にもっと近いことを明らかにした。齊藤明美(2015c)は島井浩が作成した学習書の単語の部門名には共通部門も多いが、異なるものも少なくないことを明らかにした。なお、韓国語学習書に反映されている日本語文法の様相などを考察した尹榮珉(2015)も挙げられる。

7. おわりに

去る2年間発表された40余りの史的研究論文を見ると基本的に資料、文字・表記、音韻、語彙、文法を扱っているが、研究対象は外国語資料、多言語資料(多言語資料)をもとに成り立ったものなどが著しく多い。そして大部分の論文が言語の変化時期に集中していることも注目するに値する。かなり多い数の論文が中世語から近世語に変わる時期の『狂言』を対象に文法、語彙を考察しているし、外国語資料である『捷解新語』の原刊本と改修本の差から近世語がどのように変化するのか、その様相を観る論文も少なくない。近代語から現代語に移行する時期の外国語(朝鮮語)学習書の発掘紹介と研究も活発である。

【参考文献】

- 金泳和(2016)「古代資料における[触]の読みについて」『日本語教育』76 韓国日本語教育協会 pp.37-45
- 金正彬(2015)「日本書紀(720)에 보이는 漢(あや)은 중국이 아니다 - 借字異表記의 観点에서 -」『口訣研究』34 口訣学会 pp.83-114
- 金平江(2015a)「覚一本と天草版『平家物語』の名詞述語文」『日本研究』38 中央大学校日本研究所 pp.75-92
- _____ (2015b)「日本語の否定の名詞述語文についての史的考察」『日本語学研究』46 韓国日本語学会 pp.3-15
- _____ (2016)「中世日本語の名詞述語文の形式」『日本学研究』49 檀国大学校 日本研究所 pp.245-262
- 朴省姫(2015)「『英華字典』に見える音訳地名表記の研究-『米欧回覧実記』との比較を中心に-」『日本近代学研究』47 韓国日本近代学会 pp.7-25
- 朴喜南(2016)「『捷解新語』の理由表現」『日本文化学報』69 韓国日本文化学会 pp.133-152
- 成玟珂(2015a)「근대 일본인의 조선어회화 학습서 『实用日韓會話独学』에 대한 고찰」『日本語文学』65 한국일본어문화학회 pp.59-78
- _____ (2015b)「근대 조선어회화 학습서 『일한선린통어』에 관한 고찰」『日本文化研究』55 동아시아일본학회 pp.139-161
- 申忠均(2016)「朝鮮時代日本語学習書の条件表現 - 『捷解新語』の1次改修を中心に見た逆接条件表現」『日本語文学』69 韓国日本語学会 pp.21-41
- 安照貞(2015)「韓日古代金石文の「之」の用字法」『日本文化学報』65 韓国日本文化学会 pp.5-29
- _____ (2016)「万葉集題詞における之の研究-韓日古代金石文との比較をも含めて」『日本語教育』78 韓国日本語教育学会 pp.101-116

7) 李康民(2007)「島井造와 『实用韓語学』」『日本学報』71 pp.79-91

- 梁美錫(2015) 「和泉流狂言の可能表現についての考察 - 『天理本狂言六義』 『新撰狂言集』 『和泉流狂言大成』を中心に-」 『日本研究』 23 高麗大学校 グlobal日本研究院 pp.149-170
- 呉美寧(2015) 「일본의 천자문 학습의 변천-상야본(上野本)·동대본(東大本)·곡촌본(谷村本)을 대상으로-」 『日語日文学研究』 92 韓国日語日文学会 pp.113-129
- _____ (2016) 「일본(日本) 동양문고(東洋文庫) 소장 고활자판(古活字板) 『주천자문(注千字文)』 (삼(三)Ae17)의 문젠요미 고찰」 『日本研究』 70 韓國外国語大学校 外国学綜合研究센터 日本研究所 pp.257-276
- 呉美寧·鄭門鎬(2015) 「京都 陽明文庫 所蔵『千字文音決』에 대하여」 『日本研究』 64 韓國外国語大学校 日本研究所 pp.335-356
- 柳玟和(2016) 「日本書紀における高句麗の人名表記」 『日本研究』 40 中央大学校 日本研究所 pp.65-92
- 尹榮珉(2015) 「개화기 한일 양국학습서의 특징 연구」 『日本研究』 23 高麗大学校 글로벌日本研究院 pp.171-201
- 尹幸舜(2015) 「日本の オコト(ヲコト)点과 한국의 点吐口訣의 형태에 관한 연구」 『日本学研究』 44 檀国大学校 日本学研究所 pp.299-318
- 李康民(2015) 「開化期多言語學習書と近代韓日兩國語」 『日本學報』 104 韓國日本学会 pp.51-72
- _____ (2016) 「1903年刊『日韓通話捷徑』について」 『比較日本学』 36 漢陽大学校 日本学國際比較研究所 pp.307-318
- 李盛根(2016) 「黒本本 易林本節用集에 나타나는 唐音의 性格에 대하여」 『比較日本学』 37 漢陽大学校 日本学國際比較研究所 pp.299-314
- 全昌煥(2015) 「日本吳音における臻攝の主母音について」 『日本学研究』 44 檀国大学校 日本研究所 pp.339-357
- 丁鋼徹(2015) 「捷解新語の資料性に関する一考察-韓日兩言語の方言を中心に-」 『日本文化學報』 67 韓国日本文化学会 pp.105-122
- 趙大夏(2016) 「咸攝 漢字音의 韓日比較研究」 『日語日文学研究』 96-1 韓国日語日文学会 pp.229-245
- 崔彰完(2016) 「韓日対訳資料に表われるコザルについて」 『日語日文学研究』 96-1 韓国日語日文学会 pp.265-281
- 片茂鎮(2015) 「雨森芳洲の『一字訓』考」 『日本文化學報』 65 한국일본문화학회 pp.101-116
- 河素貞(2015) 「上代日本語の 蟹撰 借字表記에 대한 고찰」 『日本學報』 104 韓國日本学会 pp.87-104
- 韓世眞(2016) 「大藏虎明本『狂言』の待遇表現-「候ふ」「です」「まらする」「ます」を中心に-」 『日語日文学研究』 97-1 韓国日語日文学会 pp.169-188
- 黄美玉(2015) 「幕末期の人称代名詞についての考察」 『日本言語文化』 30 韓國日本言語文学会 pp.165-187
- 黄童夏(2016a) 「狂言台本における副詞「なかなか」について」 『日本語教育』 76 韓國日本語教育学会 pp.77-94
- _____ (2016b) 「狂言台本における「なかなか」の意味と用法」 『日語日文学』 72 大韓日語日文学会 pp.107-123
- _____ (2016c) 「鶯流狂言台本におけるなかなか」 『日本語文学』 75 日本語文学会 pp.141-162
- 栗田英二(2015) 「日本書紀と古代韓国語漢字音」 『東亞人文学』 30 東亞人文学会 pp.101-136
- 小林芳規(2015) 「日本平安初期의 訓読法과 新羅華嚴經의 訓読法과의 친근성- 副詞의 呼応을 중심으로-」 『口訣研究』 34 (尹幸舜 訳) 口訣学会 pp.115-135
- 齊藤明美(2015a) 「弓場重榮の三つの學習書にみられる日本語について」 『日本語学研究』 44 韓國日本語学会 pp.23-42
- _____ (2015b) 「明治35年刊『実用韓語学』の研究」 『日本語文学』 65 韓國日本語文学会 pp.35-57

- _____ (2015c) 「大正7年刊『朝鮮語五十日間独修』の研究-「単語」の部門配列と日本語の特色について-」
『日本語文学』67 韓国日本語文学会 pp.29-54
- 銭谷真人(2015) 「活字化された変体仮名に見られる装飾的字体について」 『日本言語文化』32 韓国日本語
文学会 pp.25-41
- 東ヶ崎祐一(2015) 「『隣語大方』朝鮮刊本頭註の片仮名表記について」 『日語日文学研究』93 韓国日語日文
学会 pp.181-205
- _____ (2016) 「倭学書の日本語にみられる傍線表記」 『日本言語文化』37 韓国日本語文化学会
pp.37-56

〈요 지〉

일본어사 연구의 현황과 전망

지난 2년간 발표된 史的 연구논문 40여 편을 살펴보면 기본적으로 자료, 문자표기, 음운, 어휘, 문법을 다루고 있지만 연구 대상이 외국어자료, 다언어자료(多言語資料)를 토대로 이루어진 것들이 현저하게 많다. 그리고 대부분의 논문들이 언어의 변화 시기에 집중하고 있는 것도 주목할 만하다. 상당수의 논문이 중세어에서 근세어로 바뀌는 시기의 『狂言』을 대상으로 문법, 어휘를 고찰하고 있고, 외국어자료인 『捷解新語』의 원간본과 개수본의 차이로부터 근세어가 어떻게 변화하는지 그 양상을 살피는 논문도 적지 않다. 근대어에서 현대어로 이행하는 시기의 외국어(조선어)학습서 대한 소개와 연구 또한 활발한 편이다.

논문분야: 일본어사

키워드: 천자문, 문젠요미(文選讀), 교겐(狂言), 왜학서(倭學書), 한국어(조선어)학습서

■ 강인선(康仁善)

성공회대학교 교수

iskang@skhu.ac.kr